

29 明石為嗣著「X脚之治験」

(明治二二年) について

小¹⁾林 晶・奥村²⁾ 武

「X脚之治験」は明治二二年(一八八九)七月発行の「杏林之葉」第一巻第二号に、県立福岡病院外科医員明石為嗣によって発表された論文である。手術の方法、経過、術後観察などは現代でも通用するもので、術後成績も優れている。本邦の当時のレベルから見ると、困難な治療法を成功させたことは、整形外科医のみならず医学史上でも貴重な論文と言える。以下、臨床経過の概略と、背景にあつた県立福岡病院について述べる。

彼が記載した患者は十一歳四カ月の女子。血族に異常がなく、満一歳までは順調な発育であつた。生後十四カ月に重症の吐乳病に罹患し、その後歩容に異常を認め、両下肢が彎曲してきた。歩行時に倦怠感を覚え遠路の歩行で足部外側に痛みがある。

〔現症〕低身長で上半身に比し下半身の発育不良があり、著明なX脚が存在する。

〔経過〕明治十九年六月二日県立福岡病院に入院、同月七日右下肢に手術を行う。二十倍石炭酸消毒、エスマルヒ止血帯を使用(麻酔の詳細は記載がないが、クロロフォルムによる全身麻酔が推測される)。

術式は脛骨粗面下の楔状骨切り術である。骨膜はH型に切り剝離し、骨切り後二%石炭酸水で洗浄、絹糸で骨膜縫合。所要時間は約三十分であつた。特に内固定をせず、厚紙による外固定と砂枕数個による患肢周辺固定を重ねる。

創は第一次癒合、術後三週目に患肢を他動的に挙上してみて、異常可動性が無いことを確認し骨癒合の判定をしている。術後三十日目に副子固定のまま退院。固定除去日は患者で行われたのか記載がない。「退院後数十日で包帯除去、しかし恐怖の為、歩行せず」との記載がある。

同年九月十六日再入院、前回の手術は完全に骨切り部の癒合が認められた。十八日に反対側に同様の手術が行

われ、術後五二日目に退院している。

明治二二年一月（第二回退院後二年三カ月）の検診では、歩行および両下肢の形態は正常であった。

ここで施行された骨切り術は、現在でも実施されている、極めて合理的な方法である。今から百十数年前にこのような優れた方法で矯正骨切り術が行われ好結果が得られたことは、X線、満足な固定法、抗生物質の無い時代としては、的確且つ巧みな治療法であったことを示している。当時の県立福岡病院のレベルの高さをも裏付けるものである。

県立福岡病院は慶応二年設立の福岡黒田藩「養生館」に濫觴を有し、福岡医院、福岡医学校を経て、明治二二年四月に開院した。当時の院長兼外科部長の大森治豊は、本邦初のポロ一式帝王切開術を明治十八年に実施し、外科医としての令名高く、後に医科大学の初代学長および外科教授となる。手術の手腕は優れていて、「心腹切開一百例」の論文に纏められている。また、手術の術式、器械の工夫も多数行い、蒸気滅菌装置を始め手術室の床をベンガラによって紅色に染めさせた。患者が血

液をみて恐怖を感じない配慮であった。

今回紹介した論文の著者明石為嗣について現在まで判明している事項を述べる。彼は福岡県竹野郡柴刈村朝森（現同県浮羽郡田主丸町）の開業医明石三折を父として元治元年（一八六四）に出生、福岡医学校卒業後、県立福岡病院外科部に就職した。外科医としては恵まれた環境で、大森の薫陶を受けたと考えられる。その後、帰郷して父の後継者として開業後、明治三九年（一九〇六）四二歳で死亡している。福岡医学校の卒業年については、明治十九年後期に第四学年とあり、この年か翌年の卒業と推測している。弟の明石真隆は熊本医科大学長を務めている。

この調査に当たっては、新潟市樋口輝雄氏の医籍の研究と原 寛氏、松本寿通氏（ともに福岡市開業）林田邦彦氏（福岡県田主丸町開業）に負う所が大きい。ここに謝意を表する次第である。

(1)福岡整形外科病院・奥村内科